

日女薬カレントニュース第 19 号 ご紹介

＜特別寄稿＞（抜粋）

2021-22 年の COVID-19 を踏まえたインフルエンザ対策について

東邦大学名誉教授 村井 貞子氏

2021 年 6 月末から新規感染者数が激増した COVID-19 の第 5 波は、8 月 27 日をピークに感染者数は急速な減少に転じた。減少の原因に関しては、ワクチン接種率の向上、夜間滞留人口の減少等が考えられているが、一方では、日本でもブレイクスルー感染が報告されるようになっている。また、現状では感染者数の減少から生ずる人々の気の緩み等を考慮すると、感染者数のリバウンドが懸念される状況もある。気になるのが、今シーズンも COVID-19 流行の中でインフルエンザ流行の冬を迎える事であり、日本感染症学会では 9 月末に「2021-2022 年シーズンにおけるインフルエンザワクチン接種に関する考え方」を提言し、積極的なワクチン接種の勧奨をしている²⁾。その内容の一部を以下に紹介する。

日本感染症学会では 9 月末に [2021-2022 年シーズンにおけるインフルエンザワクチン接種に関する考え方 | ガイドライン・提言 | 日本感染症学会 \(kansensho.or.jp\)](https://kansensho.or.jp/) を提言し、積極的なワクチン接種の勧奨をしている。

＜インフルエンザワクチンの接種時期＞

流行時期と不活化ワクチンの減弱を考慮すると理想的には 10 月末までに行うことが勧奨される。インフルエンザに罹患して重症の合併症（肺炎）になるリスクのある集団を、本提言では特に地域生活者として注意すべき以下の人々に関して記載されている。

- 1) 高齢者：10 月以後にインフルエンザワクチンの供給が始まり次第、速やかに接種を受けることが望ましい。
- 2) 小児：ハイリスク年齢を含めた 6 か月以上の全年令小児が対象となり、接種回数は 13 歳以上の小児は 1 回、12 歳以下では 2 回。

今後 COVID-19 ワクチン接種が 12 歳以上になると接種時期の調整が必要。

- 3) 妊婦：妊娠中のワクチン接種により、母体と新生児のインフルエンザ感染を減らすことが可能。



4) COVID-19 罹患者又は濃厚接触者：以下のようにインフルエンザワクチン接種を勧める。

- ・無症状或いは軽症で自宅又はホテルで待機中の人は、観察期間が終了後にインフルエンザワクチン接種
 - ・COVID-19 に罹患して、中等度以上の症状で入院している人は、観察期間が終了し、かつ症状の軽快を認め、急性期症状から完全に回復してから接種
 - ・患者の濃厚接触者と認定された人は、観察期間が終了してから接種
- 手指衛生、マスク着用、換気の日常習慣は、COVID-19 ワクチン、インフルエンザワクチンと共に現在の SARS-CoV-2 との共棲の中で迎えるこの冬の感染予防にとっては、更に重要な意味を持つてくると考える。

詳しい解説は、日女薬カレントニュース第 19 号(11 月配信)の特別寄稿をご参照ください。

